物流ニッポン　2024年1月2日付5面

大型シャシー新規投入

全日本ライン　輸送能力を増強

全日本ライン（下戸章弘社長、東京都千代田区）では、物流サービスを持続的に提供できる仕組みの構築を急ぐ、2024年12月期は「2024年問題」対応の一環で運賃アップと時間短縮の交渉に力を入れるほか、関東地区と北海道を結ぶルートで大型のシャシーを新規に投入、全国農業協同組合連合会（JA全農）の中継輸送ニーズも精力的に請け負っていく。（沢田顕嗣）

を目的に、24㌧の貨物を積載できる全長14㍍のシャシー6台を4月から自社で運用する。シャシーは来期も4台、再来期には10台の導入を計画しており、最終的にはトータルで50台まで増やす構想だ。

更に、協力会社からの値上げ要請に応えるため、約250社の取引先を対象に運賃改定交渉を実施。待機時間の削減を柱とした労働時間短縮も申し入れる。

JA全農との連係プレーはエリアを拡大していく。親会社のファーマインド（堀内達生社長、同）が運営する青果センターを中継拠点として活用する輸送スキームを構築しており、今期は経済連・JA（農業協同組合）との新たな取り組みをスタートさせる。

輸送業務を引き受けている北海道の既存顧客との連携もより深めていく。本州に向けて青果物を輸送する途上で荷下ろしする市場名の連絡を受けると、全日本ラインが伝票発行と仕分け（荷割）を手掛けるサービスを今期から始める。

このほか、中京地区で前期から着手しているチェーンストアの店舗に国産青果物を配送する事業を拡充する。現在は量販店3社の計百数十店舗に2㌧車と4㌧車を駆使して納めているが、3月からは更に100店舗程度が納品先に加わる予定だ。

阿部篤志取締役は「当社が積極的に進めてきた輸入品のバナナをベースカーゴに国内外の青果物など混載する『統合物流』においても、国産青果物との混載の売り上げ構成比が伸びる見通し。物流危機が強く懸念されることを受け、ファーマインドが全国14カ所で運営する青果センターを中継拠点として活用すること で、持続可能な青果物の長距離輸送を実現していく。来期以降には集荷機能を担うストックポイントも当社及びファーマインドで九州、茨城、北海道において新設したいと考えている」と話している。

23年12月期はドライバーの残業時間への上限規制を見据えた備えを完了。今期は輸送能力を増強する」と

親会社のファーマインドと連携し物流課題を解決